春画裏表花二編

中

へ遠13特
843
5

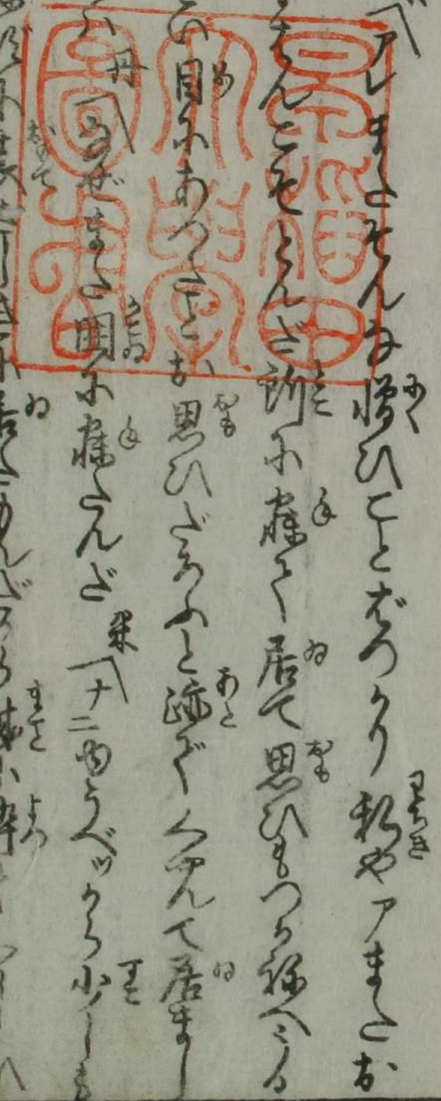
遠門 13
號 843
卷 3

春色惠の花二編巻之中

江戸　狂訓亭主人著

明治三六年
十月十八日
購求

第九回



のふ子奥へ行くと疲るとそうく寄りてのけるいろ
おようどんみ（夏八月中のこと）ろ湯を寄せふ時かふ
都にてそんをとりつく奥へ行くこのサ七日ごろ初まふ
お長さんが何ら用をさしふすれハ寄宅お兼さんと
男ろくそろくそんをろお長さんごろ微ふ寄ろさろ
さヨ兼寄ごよウく似てこいてこが子寄宅お長さんハ
んの寄の似をしく歩行のごろのとおろくこ年ろ
さハ丹次郎ハ寄ハ丹「まさそんなごろ稼へことをいふヨ

栄「さうハいふものゝお長さんもうそのそふさ稼へんぐく
てそんをと私がこりのろろ寄へぐく若旁ふ寄りまハハ
トまこしふさぐ丹「ふふがこりろの栄「ふふごとりろくお
まそんもいろ寄へぐどうせ始終ハ私きやア除ふんご
と思ふとなぜそくろまハハトこうまそ丹「ふんの又
つまろう稼へことをいふヨ始終とのろさ訪がおッくさんもあの
通りぶろりくして居へふんごろんぐふこのごろハ
疲るやうまそり鬼寄が似ハあの寄りろどの毛始

終日内(じううち)にばツかりものゝことがみえて日(ひ)にやアおいらアマア
鬱(うつ)々とおもつて居(ゐ)るのサ　米「エト　米八(よね)はじつくりせ
し様子(やうす)すこし　米「ヲヤおまへさん鬱(うつ)々といつて内(うち)にやア
居(ゐ)ないのかへ　丹「さうヨ　米「なぜへなぜそんな事(こと)をお言(いひ)
なさるんだへ。エ丹(え)さん　丹「ナアニサ今(いま)のことじやアねへ
けれどノ。そしておいらが稼(かせ)ぐへけりやア卻(けつく)いゝ
じやアねへか　米八(よね)はそれとうなづき　米「なにがいゝ　丹「ハテおめへ
逢(あ)ふといつてもヤアおめへさへ苦労(くらう)して宅(うち)を出(で)てくるし

さへあれバおいらの出(で)るくらゐにまでさせねへでもいゝと
いふやうなものゝマアさうもおもへねへがおかッさんのぶらく
病(わづら)ひがほんとうに気(き)になるヨ　米「そりやアさうだけれど
わしもそのことがあつておまへさんが家内(うち)に居(ゐ)ねへやうに
なつてからバ稼(かせ)ぎやアマアどふせふねへおまへさんが逢(あ)ふのにあひいと
といつても今(いま)さら苦労(くらう)さするも秋晩(あきばん)マア親(おや)を見(み)
て居(ゐ)る一家内(ひとうち)にくらして居(ゐ)るうちきまつてへあがらも
うましいひもあるれどまど一所(いつしよ)に居(ゐ)るまでねへやうにする

〻〻どのせふと巻紙を出して流をふく　丹　あんの泣
ことがあるものゝ今までぐれあっうさんが死でもまるやうど
アあんぎのこりいことをこの出して　丹　ちまづ　ろうさ　語
ア亀〻サアモウいやアな　栄　そまどろでもおくさんのお
ゝ苦労ふあつく　丹　おまそんのつゆハおまろさ
そ〻〻さうでもあつゝろぢりお長さんもつまく
　丹次郎ハ　丹　まさお長ゞとろさまつさも
んごありやアまけハ人子どもどアなサアもういぢやア

袖〻う　栄　あんが子どもどろでもおまそんのらひるげけを
ものごろ〻子ども　丹　なあも女房きどり〻いるきらま沢
丹　まごいつく居るのゝ者どりふあつてもあつ人でも
おませんなりあけりやアいどやアあ人ウナ　栄　いく
おまそんさんも大きふなりあるものヲ　丹　エモウ
いふ志人ナ志ッといトいるどちものと寄ゝど
〻〻笑つてある　栄　ちきの志ッこのを今意
おつまろ志まろてんトまゝ志まどつく仕ゝき　踏次を奥

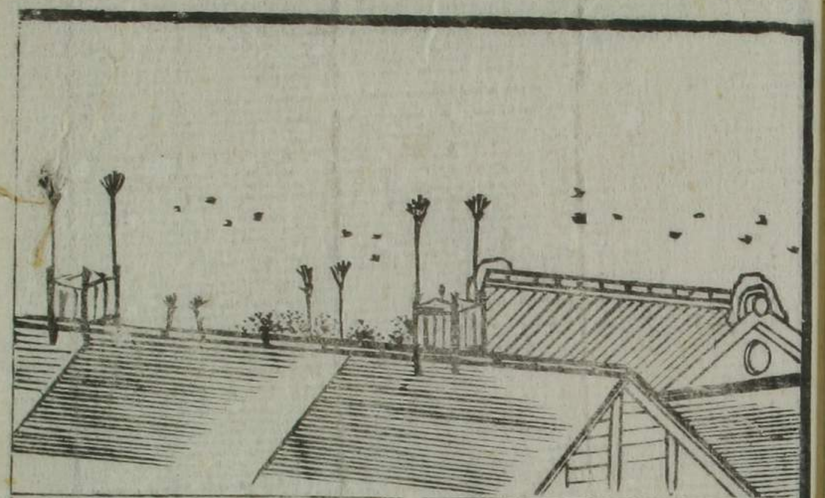
丹次郎
よう孫八
憂情を
こまやうす

延蔦

屋の声　奥へたとふあらびぐござい奥屋へよろしう
奥ゑぐございトこの商人の聲丹次郎ゞ掏ふあるう
丹へあんのあつこいもよく出来てアおいゝゞ何の角の
ものへと逃てゞるゝもふ　栄へアレまさかあさんもうそだろ
うり何時彼ゞ逃てゞるゝサアおいひあそいよ何月の何
日ふ逃まゝと　丹へいゝゝでもあげゝるじやアあるまいさ
ゝうゝでゝ神へことゞうりいつく居くおいゝアゆう
おそゝあゝアナモウゝおいゝアけゝるゞ　栄へアそん

あゝふうんあさいヨおまへんそゆゞつそんる
ことをのの病ふおまつてトいひあゝちよいと森
とろぶ　丹へおいゝアふゞん女ふまると男つく　栄へヲヤ
あんゞゝ　丹へそやゝらちをあけゝるゝサトいへバ栄
へへ色ゞゝ主林部ゝ　栄へよウゝいろゝゝあるゆをお
いひゞゝあそんあゝ彩しく居ゆうト出る　丹へどう
して居ゆうと　栄へうして居るのサトまゞめゞ居
丹次郎へまゝひあゞゝ　丹へドレどうしく居るト言ふ

ところ〳〵をうけくもりの森
うち栄八はうまーけまども笑
ひもせず自重の有り栄「よう〳〵
人をあのうりんざりおーど
丹「ナニゆてうー
しひまぜそんまらばいらぶ宅
ふ居まとりてうーいろ〳〵る
てをいろ〳〵信さのごあと」りん



の義理いっぺんゝ栄「アレモウりん
とうふ丹さんハ云地をコるく
ゴちきふてまゝせるのごゝそん
るゝだりいろ〳〵りんとうふ
今内ふ居るい者でもありやア
きるいのゝ〳〵エ丹さんうまく松を
ざゝ〳〵ゝ生ー抜く おまさんが
家内ふ居るの日ふハどうせふ

丹さん「懐思ふ〜〜ちくまるるりいてとみあるるとこと
〜〜音をつけ〜〜〜工丹さんト涙をふいてうつむいて
居る
作者曰くのごとくつけるあることをくど
く言く注うあせてうまるゞ情人の心ふ
て多く〜理屈も評義もあきのあり他目
でゑると何のこともあき言義やふふもな
き筋ゞその対ありでハろうゆるあり
ゆ〜〜〜りく若労をもるゞ考ることと

扨芸長家のたづねゆく唄をうふ子どもの声
上畳「あくばうゑゑとくうまとゝいなとゞ別まと
ちくばあハぬゞまゝ
栄「うゑハ毎日ゑく居ても宅ゞやアおゞうゞんもい
ハまとあのと思ふとまとゝふゝゆゝくるハ丹「そんな
らバあぜゆ〜〜〜ひとりろと栄「アレサおまろてくと
いッとうてゆ〜〜〜ひといッとろてをまハアノトをこ
ゝ言義ふゞきまると丹次郎ハ笑ひあゞ丹「アノと斗り

でハこゝろ強くアノあんご 栄「モウ〳〵あんごろこゝろふ
おもかやうわやアヨちきわやアいろまるいものヨト 栄何
ゝもどう〳〵きやうをもり 丹「そまでもゆてこゝいろ
いるどやアヨくゝトいつてよろ 栄「こゝ
よし〳〵きけバ栄八の声 栄「アレサマアトいつてこゝろふ
ゆつてりまふるべ〳〵 丹「あんごるおちアーる 栄「それ
でもトホ人が居るそふぐまるこゝろ
づうひごヨく 丹「そまでゝろいやう 栄「アレまこそんる

そこを 丹「そまそまこゝ火入の中へ細帯のさきぐ 栄「アレサ
そんるまハうちゆつてお亀ゑ子へ 丹「そまごろてもゝ
二階がきるッくさいといふまるとゝりいやアゑ 栄「ヲヤ
いやごヨく 丹「いやごといつてもゝ
しもとゝり裏の方ゆくく清元をさゝふ娘の 栄
強ごゝふ耳をつゝぬゝゝゝゝ車引

五緒車引哉袖褄

上り「いろゝあらそふくるゑ引さてのきぐん

うゐんのりとうわいさくらふる目

もと　下畧

栄　ヲヤまごおまそんのうわいある白　丹　おめく

のうわいさくらいろど　栄　アレサ

上り　あごふまを称る松のくせ

丹　モウいうげんふまを称白く　栄　アレマアおまちとうふ

のふヲつめいういまゐの半玲ハ黒繻子ハ口るい

祝人

第十回

昼の世界の窓をいろぐ綿の裏の粉粕ゐく故人

山東庵の筆云ふ恥ず　扨ハ花の流れハうまども

姿ハうゐうゐ廊の風情着宮よろ〳〵〳〵〳〵

てふ唐琴屋のおいらん式帯ハむらさき山まゆの肌

付を二枝ゐく出納戸天鵞絨と本國織の按合せの

平ぐけをまぐうゐく結び出納戸山まゆの襦を三ツ羽

をうくちよいと襟をとり階子をむく〳〵下りて来く

上等履をぬぎいまご掃除もせずきてゐる素人の
廊下を平身低頭縫をひし〳〵平ゞけの解らるのを
ぬ〳〵とうぐゐすとゝ〳〵裾のよごれるふきもいと
めぬいさいぐふおいらんの寛活ことまで東の名物ゐう
ぼや内洗ゆてふ娘お長火鉢をふきゐぐゐ声をうける
長　おいらんお早うお祝ひそめぐ申　アイトゆう
こりと笑ひちいさゐる声ゆゐく　のちふあそびふ
来るまゝトいひぐゐ小用場の方へ行く　長　ハイ

ありがとふ花さんハ今日居さろ志ゐるのぐみ手伝ひ
トいひくども過ゐ手ゐるまバ振むものくゐるふ式糸ハねざる
出る　長　ヨヤどふせふトいふ浅ろゐゐ赤とのふ女笑
ひ声ゐゐく　妻　モウ小用場ゐゐ出ゐく二階へ往く志
ハゐつさけゐぐぐいまゐヨ　長　ヨヤお妻どんうそを
おつきゐるゐんぐゐゐものといッゐろてゐうみてゐてもト笑
ひゐぐゐ主　妻　お長さん湯へゐてのつてお志まひゐるさいま
ゝ今日ハゐゐく妙見さゐ人へ参りませふヨ　長　アイヨ

お安どんおまへハもうおまつりう　安「ナニ私ゑやアお家
どんがまつく居まするマアおまへさんおまつんな
さいヨそーく私やアあの位ハをちらく上ケ
まするう　長「アアノおやお安どん私ゝがおきて来る時子
おゝらさんがけの少ゝ知もちがよいうう内証へ出く
ゝよふとおゝいぶつけ　安「ヲヤさうでぢいまするそを
ゞやアマアお吹やく位ハをつくまりませふト
いひなぐゝえちらせゝ内証を片付く居るト丹
次郎ハ神棚を拜ミて高ひ内証の次の号ある佛
号へまつりなぐゝ　丹「ハイ長ぢうやおゝくさんのおまんま
をちらくさせるト　長「ハイ是さん。アノ今お安どんが
おちらく取りまゝヨそーくおゝくさんハ今私ハもの
所へ出くおあゞんなるとサ　丹「さうく其ハいくの
そなでもマアおまんまハ毎時のとおり和らゝい方がい
うゝ別ふまゝらくさせく亜ヨトいひ付く仏檀へ
おがゝふうる　長「ハおお安どん其ハどやアア私ハ湯へまつり

安「ハイよろしうございまして、あなたのつくおきをひみ
さいヨ今ゐまさ鬼ぢいが帰りまさヨ 長「アレそんなことを
をいいひぐるい恵いるヲぢッうり 安「ナニ今ゐまさものゝ
軟弱ゐ仕といつも毎日ものを出ぐきろと開ひ
ものゝ例でも仕のごろふ音陸ゐ光爺ゞト支配人の
嘲をいふたの中い長八俗衣を呂ゝ湯場へ行米八八
湯より上りゐゝの程ゐく化粧をしゝ居ゝお長八
との茶を通りゐぐら 長「ヲヤ米さん風粧をいひきぐ

米「ハヨトいバ米八八 安「ありゞゝふ今長湯をしゝう
あつくつゝありませんヨおまへさん今おまのりゝ紙
湯ぐありまさヨまゝおまのり 長「ハイきうゝト湯へ
まりふゐけバ引遠ゝ若い者赤助 安「米八さん
義さんの方へ仕ゝおんるさのま 米「アイ今ちろと
ゝぐらゝをして仕ヨ箱をゆゝ雪ゝおゝ 安「ハイ
お早くトいひるぐらゝ入せの方へゆゝ内所ゆゝ八丹次郎
ゝ聲を言ゝくして 丹「米八さん義さんの方へ出るヨ

情状酌量
妓楼は
居続も

米ハイトいろ〻さだろう　きものを長哥〻〻新あの次の
まるより丹次郎の臭をちよいと〻〻　米まめりまし
ヨト小智ゆ〻いふ丹次郎も侍を〻〻ぐら　丹ヲイト返
るを志るぐ〻線香を志る〻ぐ一云の問着もおわき人
目の冥の中男ハ浦き意情るぐ〻　さて又表二階ゆハ
氏糸の客茂糸居續けと〻〻本るのまんじくちち
よいと勝をうけ廻りふ金前往をせ〻　大きるさん
ぐ〻臭をうつけ　楊枝をつ〻〻居る中のるゆハ

番頭新造皇面火鉢の大きるを二つるぐ〻茂
方の灰をきるいゆ〻て樣炭をつぎるぐ〻　氏里
さん本るの火鉢をゆ〻〻いろんるんしを〻〻次の
るの火鉢つる沢山炭をつのぐ〻湖壷の漏ぢみて
おい〻〻ん〻ん〻ショさんるる花吹や茂さんのうぐひ茶
極をもつ〻住ろショきり〻〻汚付〻〻ちまやヨトいひ
ぐ〻中のるの火鉢を本〻〻　氏里さんサア汚方
引〻〻おん〻ん〻〻　氏里二だんまんざう〻本るの底のるそのろ
るつ〻ぐのぐつけをのこ〻ぐ汚づけ

[illegible]

茂「この火鉢をこゝへもつて来るとのつて大さうぎをもつ
てのつと笑ひなぐら居る」ヨヤ茂さん蒲団の上ふいもを
いんきんる 茂「ナアニおいらアあの良の板牛しふ通り
匂ハきつのどサアー酒ふ来てもらふじやアあるう」ヨヤさう
ざるほうそをとじやア蒲団をあげてきたのふ来てふ
じやアあるませんう 茂「さうヨ〳〵さうしてもらふふ
今ふまつと来社が来ると大さうぎざう」ヨうんみの花形や

吉兵衛どんを早く呼んで来て床をあげさせや
そして吉野ハどうしたのヨ 源ふ「うぐいよウトしひ
なぐう次の男人三五」ヨヤざきじやアおいらんのうち伺の
男ふ湯ちう上ろつて来さつしつてうぐいの水ハあり
ませんか 茂「アイいの湯上ろつて来ます」
ヨヤ水もあるませんが子茂さんハ子今揚枝
を来つて来ますとさだうざるヨマアすぐ
ぐらくをしてくおまちなさいうんしヨ 吉「さうざるなら

私きやアのうまぶっきざんもヨ　栄さんハ来イしゝとく
イ　エまゞざまるヨ　何をしゝく　居るゞろく　内所の衆
ざりつえさぐつく　これハ母次郎の　アレサそんなみるゆを
ことをいのゝ
おいひうんをみ　何ざろ　ちまきやアちませんハ子。マアちよッ
とサト　代里の耳ふ口をよせ　子。子ト　何ろ　唄〳〵
こまハ栄八と夜ふ衆とよりけもあるやうふ思
いるゝこのちまゝ〳〵みゝく　代永ゞ兼ゝく　栄八
この話合せとちまゝ〳〵

子　そまゞざろうあまよりやアその方があやしう
ざんたアな　あんざうハきものをつぶし　ヲヤ〳〵さうざん
うれいろゆてあうりをえまハ〳〵
ちろ私きやアうッうりざまるゞ子ちッとる　きがつきまよ
せんヨマア〳〵　アレサちまゞそんなことをいつ　ちやア
つるうざんもヨ　ナアニそんなことをトいふうちめの
あけく栄八　おいうんトいつさざりふ　居ると
ヲヤざうしゝシざよ　栄さん　何をしく　居るざろく
そんなふつくゝばともいよよ　まるまゝ　マア

ころへきりう走へのウヨ　米「ろんみさまでござりまし
さッけまでまのノもおるい中の前うちまたハおりう
し　ひ子ト　いひながらおつとそのうちおいらんのきやうざいのそばへまいりながらひそく　あるを　此米「マア
いよおやく　花さん所へ往なヨト　いひながら　米「まじや
アきろと有徳がひ　此米「アイヨ承知じやといふのハ　此のと紀此
わざと花里紀と　米「ヲヤ此里さんへ　此「アイきんぶさんも　米
さん用があるなら本まへ来なまし　ト大きな聲なかく
いふ　花「米さんそいさうおう件どのうちちへ　来さくま

いうじやア福へウ　米「アレ今そこへ来るのでござりますに
ハ子ト　本まへきのり　米「花さんありがたふ　ト　おじぎをしてく
米「モウく　此里さんの大きな聲でおびへますにヨウ　此「それ
ごろてあんまり多件ぶろうサ。子へ花さん　花「ナアニまろ
うりとめりくおいらふ又花そのふと思つてサ　此「ヲヤさう
ざアまろねしの八赤ひらしかざりたらハ　米「ヲヤ否ざ　花「ナニ
いやぶ　米「アレぬしのことじやアありませんヨウハく　此「ヲヤ
そ主じやア私しのことでござりませぬ何がおかしう

ごぞいます〳〵ト大きなこえをひるがへ　爰
いへこゝろ〳〵ゴロ〳〵てゐる
どうぞアちよいとそでめとうふぐやア福へうの　米
きこう
さ子　丈
〳〵サアもう出来まし〳〵よこをマアそこ〳〵
ちせふト　こゝいてうあしのぜんへいろ〳〵のやうのあぐ〳〵　丈
いどまちのをりこゝろれより泰のものをもちまる　そこ〳〵
るゆう来まし〳〵ヨヤ丁度いい　爰　吉どんちよつと蒲
えん
生をあげ〳〵　性〳〵こんみョ　吉　来どんハどふ〳〵こち
と来ま〳〵よづるいヨウ　爰　〳〵ハイ　私〳〵あげませふいま吉
爰　〳〵ハトの秋生をさとんぐ　ありまして　トいひるがへ
りんまの秋

あをちよいと肩ゆひつうけ〳〵一まいづゝ次のるの　丈　〳〵こんみ　丈　爰
ゆぐぶる爰のせる丈里ハつぎのるのうこ〳〵むりひこ〳〵
さんでもぐまでも帰来をとつ〳〵来〳〵ちよいとまん
じ〳〵あまとこの所をさ〳〵ぜ〳〵ちよん〳〵爰さんハきまこの好
であ〳〵ッ吉ゆ〳〵〳〵　爰　〳〵そのるゆ〳〵〳〵ヤレ〳〵ゆ〳〵〳〵方が
付〳〵　歳　芸〳〵ちふ〳〵まる　ゆ〳〵ふるゆ〳〵。ヨイ〳〵　爰　吉
ぢ吉　儀　ぐ〳〵ちよつと　揚　町　ぐ　性〳〵来〳〵下ッ
爰　〳〵イ〳〵どこ〳〵　集　ます　爰　〳〵アノ　秀吉　丈　をよんぐ
来〳〵ぐせ〳〵　爰　〳〵イ〳〵ト　主あぐる所〳〵おいらん

次の号より本号に入る

春色恵の花二編巻之中終

揚太真遺傳

上處女香

精製桐の箱入

一廻り百二十文

そもく神代の昔より男女ふ泥くさく新の靴とうるわしく
して手まと毒うてもやはらかくて絹すりたるとも
ゆく〳〵し新の業世間ふ多く白粉洗粉化粧水油業ども成業して
はなはだくく新の業にするおもひたとも純書ふ多くてかまとよりその素肌の
ほ分もの純色恢々しく活潑豪とゆ殘とても久しかめ〳〵ふ多くて青淋
ゆ〳〵べきつるんがこまいきく古粉ふ嘉業ある業まてやうれる長一枚
見いりまつても忽ちふ効能の新まる効業ある業一四ち用いるしそふ西新の

色自然と搖のごとくなり一日用ひまゝ何程ふるあれの机用も
用二年洗のごとくなれども清うとるのゝるべし。もしなほ。
の外。もゝの新おしも添ふく清うとうらくうるとなる。
洗ひこの玉粉を紙をうつ白粉と付ける粉ふるもふく
白粉素皮の白くうるしなれ粉ようれい粉白方ふるふ不及年度は方が
用ひそれ自に色ばしてふくるる製法ゆる品新ひふく白用ひ粉され
真の美人とうつくしべ〜〜

為永春水精製

髮の艶を髮を洗ふ
髮洗をさる

妙業 初みがつる

この玉粉を洗ふ髮を
ゆ〜ひ〜ようもうとく
ようのう有 代三十六文

書物兼繪入讀本所

江戸京橋弥左衛門町東側中程

文永堂 大嶋屋傳右衛門